

5) ゴギョウ=五行／御形(母子草)

ゴギョウは正月の七草の時に用いる名前で、通常は母子草と呼ばれ、『御形』と記す場合は「オギョウ」と読むことが多い。キク科の越年草で日本各地の道端や畔の縁、休耕田などに自生する。高さは20~40cmほどになり、茎も葉も白毛に覆われている。4~6月頃に淡黄色の小さな花を茎頂につけ、球状に集まって咲く。和名の由来は葉に白毛があり、乳児の舌を思わせることによるとか、古い株と新しい株が母子のように寄り添って生えるためとか、この草を中国名の『白蒿』(ハクコウ)と誤認し、その異名である『ハンハッコウ』がハハコに転じたものとか、諸説がある。このため別称も多く前述のオギョウのほかに、ハウケグサ、シダリグサ、シンジコ、キバナクサ、カワヂチオコバナ、ホーコーヨモギなどが主なものである。この中でホーコーヨモギは、岡山、広島、島根などの呼び名で、前述の『白蒿』もヨモギのことをいい、春の七草というものは御形といい藜縷(ハコベ)といい、多かれ少なかれ、ヨモギとの関わりが暗示されるのである。これは中国でのヨモギにまつわる習俗が、日本に入ってきたとき、ヨモギの効果が過大に伝えられた結果、多くの日本人がヨモギなるものを求めて、似て非なるものをヨモギと誤認したためではなかろうか。1709年に成立した『大和本草』には「黄花蒿をござやうと云。正月に用いる七草の一なりと云。非也。ござやうは鼠麴草なり」と記されており、ゴギョウが『黄花蒿』(コウカコウ)ではなく、『鼠麴草』(ソキクソウ)であるとしている。学名は『*Gnaphalium affine*』で、属名は軟毛で覆われた植物を示すもので、種小辞は「近似の」という意味である。一方、中国では『鼠麴草』もしくは『鼠耳草』と呼んでいる。麴は麴黴(コウジカビ)のことを意味しており、ここでは白い軟毛を黴にたとえ、同じく鼠耳草はこの植物の葉をネズミの耳にたとえたのであろう。フランスでは『herbe à coton』で、「綿の草」を意味している。全草が軟毛で覆われているために、この名が付けられたのだろう。

ところで中国では3月3日には、御形で作った草餅を食べる習慣があった。このため日本でもこの習俗をまねて、御形を餅に入れて草餅として食べたのだが、次第にヨモギにとって替わり、今ではヨモギ入りの餅はよく作られるが、御形の草餅は見られない。しかし春の七草の一つとして若い茎や葉は、正月の七草粥に入れて食用とされ、3月を代表する植物として人々に親しまれて来たことに変わらない。

老いて尚 なつかしき名の 母子草 高浜虚子

ははこ摘む弥生の月になりぬれば ひらけぬらしな我が宿の桃 『好忠集』
などという歌も詠まれている。因みに好忠とは曾禰好忠で平安時代の歌人である。

ゴギョウもさまざまな植物と混同されており、レンゲ、カワラヨモギ、シロツメクサのことをいう地方もある。もとはといえば、五行とは木、火、土、金、水のことをいい、我々の日常生活に欠かすことのできない5つの物質を表わしていた。どんな因果でこの五行説と、この植物の名前が結びついたかは残念ながら分からない。



オギョウの花は、御形とも五行とも記し、オギョウとも、ゴギョウともいうが、通常は母子草と呼ばれている。また秋に花を咲かせるものを秋の母子草という(さいたま市大宮区)。



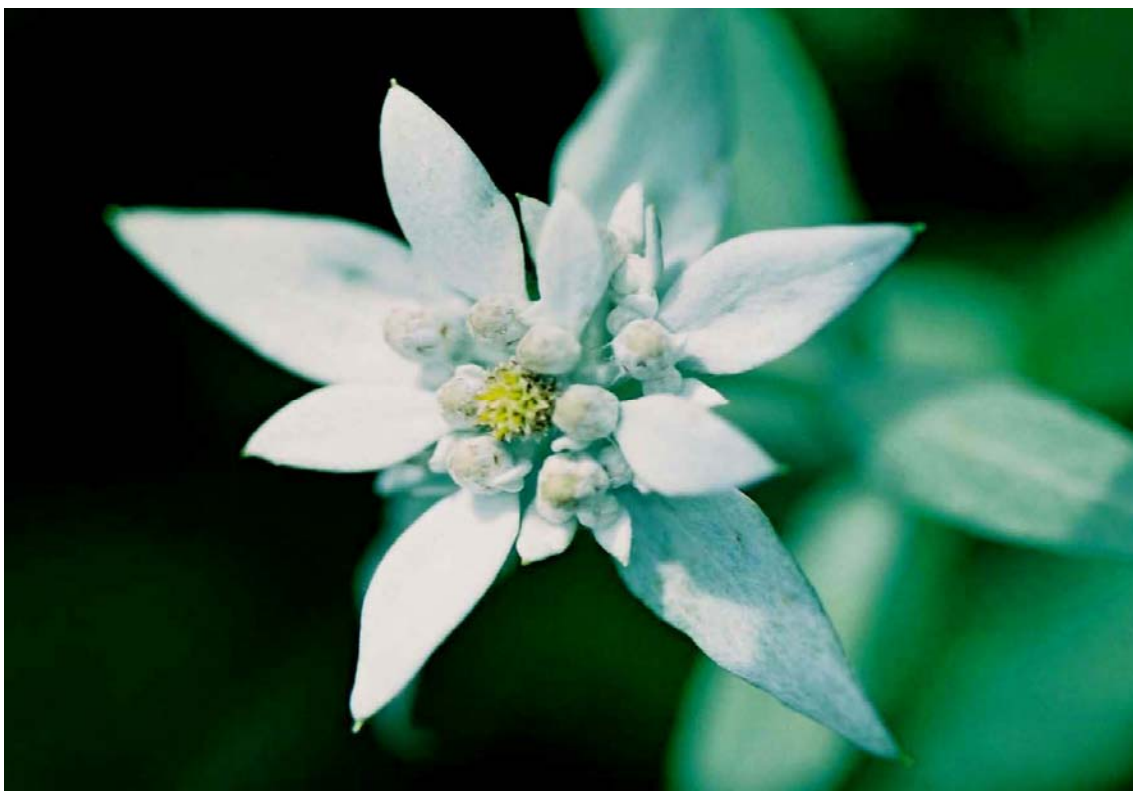
オギョウの花、キク科の多年草で春の七草の一つである(さいたま市大宮区)。



近縁種のヤマハハコは、学名『*Anaphalis margaritacea*』で、雌雄異株である。中部地方以北の山地のよく陽の当たる、草原や法面などに自生する(さいたま市大宮区)。



高山植物としてよく知られているハヤチネウスユキソウ。これもキク科の多年草である。



ハヤチネウスユキソウの学名は『*Leontopodium hayachinense*』で、ヨーロッパの高山植物である「エーデルワイス」(学名は『*Leontopodium alpinum*』)によく似ている。



ハヤチネウスユキソウ。本種の変種には北海道大平山に自生するオオヒラウスユキソウがあり、学名は『*Leontopodium hayachinense var. miyabeanum*』である。

[目次に戻る](#)